

大川周明

白杵 陽著

A級戦犯として東京裁判で起訴された大川周明。法廷で東條英機元首相の頭を丸めた紙でたたき、精神を病んだとされて免訴になった。何とも論じにくい学者だ。

大川は列強の植民地史の研究者だった。イスラム教にも強い関心をもち、『回教概論』を昭和17年に出版した。大川のもことから井筒俊彦をはじめ、戦後のイスラム研究がスタートしている。

『復讐細亜の諸問題』『米英東亜侵略史』『日本二千六百年史』など大川の著作を読んでもみると、その正確な世界情勢認識、研究レヴェルの高さに印象づけられる。真珠湾の開戦直後、2週間10回にわたってNHKラジオで、大東亜戦争の意義を国民に直接語りかけた。それが戦争の旗振りともみなされ、民間人で唯一、東京裁判の被告となったのである。

著者白杵陽氏は、中東研究者の立場から、大川周明がなぜ、またどのようにイスラム研究に取り組

白杵 陽

大川周明

青土社・2400円

▼うすき・あきり 56年生まれ。日本女子大教授。著書に『見えざるユダヤ人』など。

中東研究の視点から実像に迫る

んだかに光をあてる。大川は冷静で非宗教的な人物だったから、ムハンマドに興味をもちスーフイーに惹かれた。大川によると、イスラムは非西欧(アジア的)であるが、東洋よりも西洋に近い。イスラムとの連携は欧米に対抗する当時の日本の国策だったが、大川の興味はむしろ、純然たる学問的関心によるものだった。などなど、大川の多面的な実像の輪郭が、少しずつ浮かびあがってくる。

わが国のイスラム世界に対する関心は、明治以来、今日にいたるまで、概して低調である。イスラム教に関する知識も乏しい。そんななかで例外的に、大川周明は、バランスの取れた認識を示している。これは、アジア主義、國家主義とみなされる彼の立場と、関係があるのだろうか。

大川周明の学問の根底にあるのは、列強の植民地となり犠牲となっている、第三世界の人びとの境遇に対する共感であると思う。明治の日本は弱小で、列強の脅威をひしひしと感じていた。戦後、経済大国となり、慮げられた側への共感を失った日本人は、大川の国際性と国籍性の結びつきを矛盾とみて、評価に悩むのである。本書はそうした大川の実像に迫る、意欲ある試みだと思ふ。

東京工業大学教授

橋爪 大三郎